学校事例①

茨城県立竹園高校

プロジェクト型英語学習で、「軸」と「修正力」を支える汎用的能力を育む

茨城県立竹園高校は、2006年から英語の授業で、プロジェクト型の「ACEプログラム」を取り入れている。ディベートやディスカッションなどで求められる力を、日々の授業を通して培っていくプログラムだ。より高次の能力が求められるプロジェクトへと、段階的に目標を高めていく中で、生徒は主体的に学習に取り組んでいる。

英語力の向上にとどまらずジェネラリストを育成

多くの研究機関がある筑波研究学園都市の中心部に位置する茨城県立竹園高校は、県内屈指の進学校だ。2014年度大学入試では192人が国公立大に現役合格するなど、例年安定した進学実績を出している。

同校では、どのような変化に対しても主体性を失わない「軸」と、変化に対応するための「修正力」は不可分な関係にあり、同じ力や姿勢に支えられていると捉えている。3学年担当の植木明美先生はこう話す。

「教科学習で育める『修正力』とは、一言で表現すると『応用力』なのだと思います。英語におけるそれは、思考力、判断力、表現力であり、コミュニケーション力や発信力です。それらの力が身に付いてはじめて、どんな変化に対しても自己修正できるようになるのではないでしょうか」

同時に、それらの力は、自分の価値観や意見、すなわち「軸」を形成する上でも必要であると、2学年担任の岡島岳暁（たかあき）先生は話す。

「『軸』をつくり、『修正力』を構成する様々な力を持つのは、特定分野だけに秀でたスペシャリストではなく、全体を俯瞰（ふかん）できるジェネラリストです。私たちが育てたいのは、専門人ではなく全人なのです」

そうした考えの下、2006年、英語の授業で「ACE（Approach to Communicative English）プログラム」を導入した。大学や社会に出てから必要な力を見据え、英語力にとどまらず、ジェネラリストの育成を目指す教育活動だ。学年ごとにプロジェクトを設定し、通常授業と相互に補完し合うことで、3年間を通して英語によるコミュニケーション能力や論理的思考力、発信力といった幅広い力を育てることが目的だ。

入学時の意識付けが3年間の成果の鍵を握る

プロジェクトは、1年生はレシテーション・プレゼンテーション・多読、2年生はスピーチ・ディベート、3年生は模擬国連・ディスカッション・エッセイを設定している（**図1**）。各プロジェクトには数時間を充て、学級で発表などを行い、それ以外は教科書を使って授業を進める。プロジェクト、通常の授業共に、オール・イングリッシュで行われる。

ACEプログラムの成否を左右するポイントは、入学時の意識付けだ。

学年が上がるに連れてプロジェクトで求められる能力のレベルは高まるため、初期につまずくと、段階的な成長が期待しにくい。

茨城県立竹園高校
植木明美　うえき・あけみ
教職歴31年。同校に赴任して9年目。教育相談部長。「何事にもバランスが肝要」

茨城県立竹園高校
岡島岳暁　おかじま・たかあき
教職歴20年。同校に赴任して6年目。2学年担任。「結果を焦らない。学びは無形財産、未来への共同投企」

茨城県立竹園高校
宇野裕美　うの・ひろみ
教職歴6年。同校に赴任して2年目。1学年担任。「生徒に自分を偽らずに接し、生徒から学ぶ姿勢を持つ」

茨城県立竹園高校
◎国際理解教育や英語教育に力を注ぎ、国際社会をリードする人材の育成を図る。普通科と国際科を設け、2年生から学科・コース別の授業を展開する。2003年度～2007年度スーパーサイエンスハイスクール指定校。
◎設立　1979（昭和54）年
◎形態　全日制／普通科・国際科／共学
◎生徒数　1学年約320人
◎2014年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、北海道大、東北大、茨城大、筑波大、東京大、京都大、大阪大などに224人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ909人が合格。
◎URL　http://www.takezono-h.ed.jp/

入学時の生徒は、一定水準以上の学力を備えているが、英語に対する意識は様々だ。中には「英語は嫌いだけれども、仕方なく勉強している」という生徒もいる。プロジェクトでは、いかに分かりやすく表現するかを工夫する必要があるため、自分で調べたり、考えたりするなど、自ら取り組む姿勢がないと、大きな成果は得られない。そのため、1年生の最初の授業でオリエンテーションを行い、学習の意味をよく考えさせる。

「目の前の学習と将来の自分との関連が具体的にイメージできることは、内発的な動機の支えとなります。ACEプログラムを通して身に付く力を明示し、それが大学進学を経て、社会に出てからも大いに役立つことを説明します」（岡島先生）

オリエンテーションでは、2年生や3年生の先輩がディベートやディスカッションを行っている様子を撮影したビデオを見せる。1学年担任の宇野裕美（ひろみ）先生はこう説明する。

「先輩の姿を通して、『自分も英語が出来るようになりたい』という思いを持つことは、学習への強い動機付けとなります。プロジェクトで優れた成果を出すための力は、普段の授業の積み重ねによって培われることも強調して伝えます」

実際、通常の授業は、プロジェクトで求められる力を強く意識した内容だ。例えば、1年生の授業では、レシテーションに備えて多読をしたり、プレゼンテーションのための素材集めや意見形成の要素を取り入れたりしている。授業中、「この学習はプレゼンテーションで役立つ」な

図1　「ACE プログラム」3年間のカリキュラム

	1学年	2学年	3学年
到達目標	❶論理的にまとまりのあるプレゼンテーションが自信を持って原稿を見ないで出来る。 ❷多くの英文（5万語以上が目標）を読み、英文を読むスピードを速くすることが出来る。	❶相手の意見にその場で対応しつつ、その意見を踏まえ、論理的に自分の意見を主張できる。 ❷ディベートの内容について、自己の主張が一貫した文章で書ける。	❶与えられたテーマについての英文を読み必要な情報を得ると共に、お互いの意見を尊重して合意を形成するために話し合うことが出来る。 ❷ディスカッションのテーマについて、自分の意見を論理的にかつ正確に書くことが出来る。 ❸大学入試レベルの英文を速く、正確に読むことが出来る。
プロジェクト	❶レシテーション ❷プレゼンテーション ❸多読	❶スピーチ ❷ディベート	❶模擬国連 ❷ディスカッション ❸エッセイ
下位目標 1	大きな声で発話できる。	英語を聞きながら、要点を押さえた効果的なノートテイキングが出来る。	お互いに意見の違いを理解した上で、合意を形成するために話し合うことが出来る。
下位目標 2	相手に通じる明確な発音が出来る。	教科書の文章やそれに関連する題材について、筆者や話し手の主張をしっかり捉えた要約が出来る。	書いた英文を見直し、表現や文法を自らお互いに訂正することが出来る。
下位目標 3	必要な情報を収集できる。	あるトピックについて収集した情報を客観的に分析し、活用できる。	センター試験レベルの英文を 180wpm 以上の速度で読むことが出来る。
下位目標 4	論理的にまとまった英文を書くことが出来る。収集した情報をプレゼン用原稿としてまとめることが出来る。	あるテーマについて、客観的な視点から自分の意見を論理的にアウトプットできる。	国公立大個別学力試験レベルの英文を正確に読むことが出来る。
下位目標 5	アイコンタクトをしながらはっきりとした大きな声で発表が出来る。	相手の意見に対し、その論理性を分析し、即座に自分の意見を主張できる。	

＊学校資料を基に編集部で作成

どと伝え、プロジェクトとのつながりを意識させる。

2年生、3年生の授業では、教科書の本文を読んだ後、5W1Hを押さえる本文に関する事実確認をしてから本文の要約を記述する。その一連の作業を通じて、簡潔に要点を説明したり、物事を抽象化して捉えたりする力を育てる。次に、本文のテーマに関する情報を集めて分析し、考えに幅と深さを持たせた後、グループディスカッションを行い、本文のテーマについての各自の意見を深め合う。そうした授業を繰り返すうちに、生徒の意識は「教科書の内容を勉強する」から、次第に「教科書を材料として力を付ける」に変わっていく。その変化から主体性の育ちが見て取れると、同校は考えている。

答えのないテーマの議論が社会で働くための訓練に

学習に向かわせる仕掛けとして、生徒の学び合いを促している。

1年生から、授業冒頭のウォームアップや予習の答え合わせ、授業中の意見交換など、ペアワークやグループワークを頻繁に取り入れている。そうすることで、学び合いの時以外でも分からないことがあると友だちに相談したり、教え合ったりする姿が見られるようになるという。

1年生のレシテーションでは、クラスメートの前で2分間の暗誦（あんしょう）を行うが、初めてのプロジェクトとあって不安を感じる生徒は少なくない。

「発表では、つかえたり間違えたりした生徒に対して、周りから励ましやアドバイスなどの声が自然に起こります。そういった温かい雰囲気を感じ取り、自信がなかった生徒も前向きな気持ちで発表に臨むようになるのです」（宇野先生）

最初にレシテーションを体験すると、生徒の意識は大きく変わると、植木先生も説明する。

「人前で表現をすると、心が解放されて自信が付き、自己肯定感が高まる効果があると考えています。そうした気持ちや、間違えても受け入れてもらえるという安心感が支えとなり、次の活動にも前向きに取り組むという好循環が生まれています」

他者の発表を見ることも大切な学習だ。発表を注意深く観察して、多くのことを学び取れるように、「エバリュエーション・シート」を用意して、生徒が相互評価するようにしている。例えば、レシテーションの評価では、正確性や発音、音量、感情が込められていたかなどを、それぞれ5段階で評価する。

「仲間の素晴らしい発表に触発され、期待を大きく上回るパフォーマンスを見せてくれる生徒は少なくありません」（植木先生）

グループの協同作業は、学習への動機付けとしても機能している。例えば、ディベートは、個々の生徒が準備した材料を基にチームで戦略を立てるため、「チームに貢献したい」という思いが生まれやすい。逆に、意欲の低い生徒には、チームのメンバーが「きちんと用意してほしい」などと言ってお互いを指摘し合い、それが非常に効果的だったという。

あらゆる場面で生徒に考えさせることも、前向きな姿勢を引き出すための工夫だ。例えば、教科書の本文を読んだ後、「あなたはどう思った？」「あなたならどうする？」などと発問し、自分の考えを持つように求める。更に、ペアやグループで意見交換する機会を多く設けていることも、各自の考えを深めさせるという点で役立っている。

「ディベートでは、白黒がはっきりしないテーマを取り上げています。生徒は、友だちの意見を聞いて『そういう考え方もあるのか』と見方を広げたり、根拠を持って説明することを通して自分の考えに自信を深めたりします。社会に出てからの仕事では、正解のないテーマに取り組むことばかりです。プロジェクトは、そのための良い訓練になると考えています」（植木先生）

創造力を発揮したくなる課題で学習意欲を引き出す

ACEプログラムでは、ワークシートを学年統一で用いる。どの生徒もプロジェクトで一定水準のパフォーマンスが出せるよう、授業の内容や進度をそろえるためだ。更に、プロジェクトの実施によって授業進度が遅れないよう、プロジェクトを効率良く進めるためでもある。

ワークシートは、教科書の内容を基に、英語科の教師が分担して作成する。フォーマットは、学年によって多少異なるが、「Words」「Warm-

up」「Comprehension」「Summary」「Discussion」「Further Reading」といった共通の要素で構成される。

予・復習の内容もワークシートに盛り込んでいる。例えば、1年生で戦争に関するテーマを扱った授業の復習では、自分の意見を短文で記述する課題を出した（**図2**）。前年度の優秀な作品を掲載し、具体的なイメージを与えると共に、高い目標を持たせている。その例に限らず、生徒が創造力を発揮したくなるような様々な課題を設定している。

「創造力が必要な課題を出すと、『良い作品を作りたい』といった内発的な動機につながります。持ち寄った作品は、グループ内で見せ合い、代表作品を選んで学級で発表します」（岡島先生）

他の学習場面でも、生徒が学びたくなるような素材を用意する。例えば、授業や試験で扱う例文は、ありきたりの内容ではなく、生徒が覚えたくなるような文章を厳選して載せる。レシテーションでは、様々な映画から12シーンを抜粋し、生徒が好みの1つを選ぶようにした。

図2　復習のワークシート例

【 ESSAY 】　Class___ No.___ Name_____
Describe "War (Peace)" and share your ideas with at least three people.

【Explain why】

【Japanese translation】

【 Examples 】
Mankind must put an end to war or war will put an end to mankind.　－John F. Kennedy
人類は戦争を終わらせなければならない。さもないと戦争が人類を終わらせるだろう。
If everyone demanded peace instead of another television set, then there'd be peace.
－John Lennon
もし、皆が新しいテレビの代わりに平和を求めるのならば、平和は実現されるだろう。
【 2013年度1年生　秀逸作品 】
Mankind lives using techniques to kill mankind.　Peace cannot be established on this contradiction.
2年
人を殺した技術を使って人は生きている。この矛盾の上に平和は成立しない。

Nothing is more uncertain than "justice".　A conflict between justice and another justice makes a war.
7年
正義とは何よりも不確かなものである。正義と正義の対立が争いを産むのだから。

War is like a mirror.　We will see our true but ugly mind in it.
8年
戦争とは鏡のようなものだ。人類はそこで己の本来の醜い姿を目にすることとなるだろう。

Exchange your sheets with your classmates. Correct their English if you possibly can.
Grade their work in the following way.
Unique / Creative / Understandable / Poetic

Grader	Grade	Notes / Comments

課題として考えてきた作品を、グループ内において、Unique（独自性）、Creative（創造性）、Understandable（分かりやすさ）、Poetic（想像性）の観点で評価し合う。　＊学校資料をそのまま掲載

失敗経験を積み重ね たくましさも育つ

ACEプログラムは、思考力や表現力、コミュニケーション能力といった汎用的能力の育成に力点を置くため、成果は目に見える形で表れにくい。しかし、教師たちは授業を通し、生徒たちの明らかな変化を感じ取っている。

ACEプログラムの導入当初は、ディベートやディスカッションなどがなかなか活発にはならなかった。そこで、ノートテイキングやリスニング、発表など、アウトプット主体の学習を授業で充実させた。すると、次第に一人ひとりのアウトプットは、質・量共に大幅に改善した。

また、授業やプロジェクトを通して、たくましさも育つという。

「思い通りに発表できず、自己嫌悪に陥る生徒もいます。それでも、みんなが頑張っている姿を見たり、友だちからフォローされたりすることで、『自分は1人ではない。諦めずに頑張ろう』と前向きに頑張るようになります。そうした体験は、生きていく上での軸の形成につながると思いますし、仲間と協力して新しいものを生み出す姿勢は、変化を求められる場面に遭遇した時に必ず役に立つはずです」（植木先生）

同校は、大学に入ると留学する卒業生が多いが、それもACEプログラムを通して培った自信や精神力が一因ではないかと捉えている。

卒業生からは、「高校の英語の方が大変だった」「ディベートの経験が役立っている」といった声が寄せられている。更に、大学の授業でディベートを行う時、中心的な役割を担っている卒業生が多いという。

ACEプログラムは、教師にとっても生徒にとっても、決して負担は軽くない。しかし、生徒の意識や学習姿勢の変化を通して、同校は取り組みの確かな手応えを感じている。